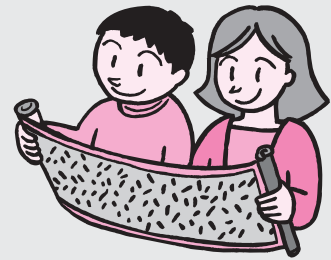


「門司の歴史」への招待

むかしの人たちの暮らしの跡を「遺跡」、その跡から発見された物を「遺物」といいます。

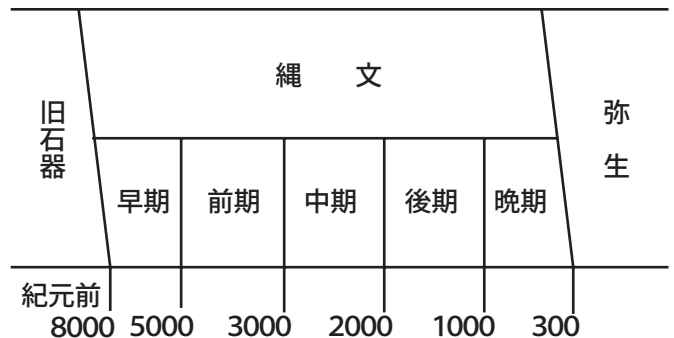
ですから、門司に残る遺跡の場所は、わたしたちのふるさとといえます。そのふるさとの地でわたしたちの祖先は、どんな暮らしをしていたのでしょうか。さあ、ページを開いてみましょう。門司の歴史を楽しんで下さい。



1. 縄文時代

およそ1万年前～紀元前3世紀ごろまで続きました。縄文式土器や磨製石器を使い、狩りや漁をして暮らしていました。

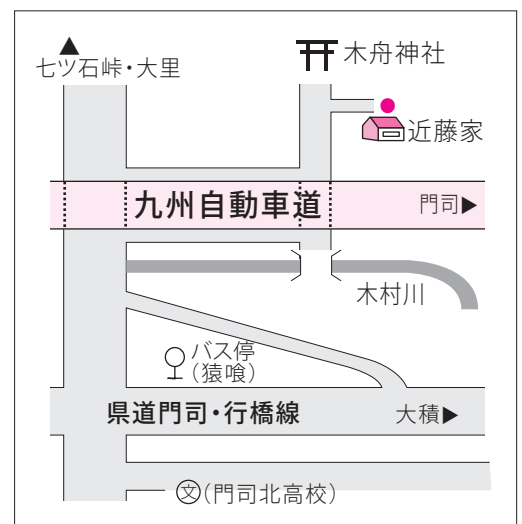
私たちのふるさと「門司」の始まりもこのころです。



(1) 土壌墓に死者を葬った猿喰・平山の縄文人



猿喰の近藤家の竹林に残る約3700年前の土壌



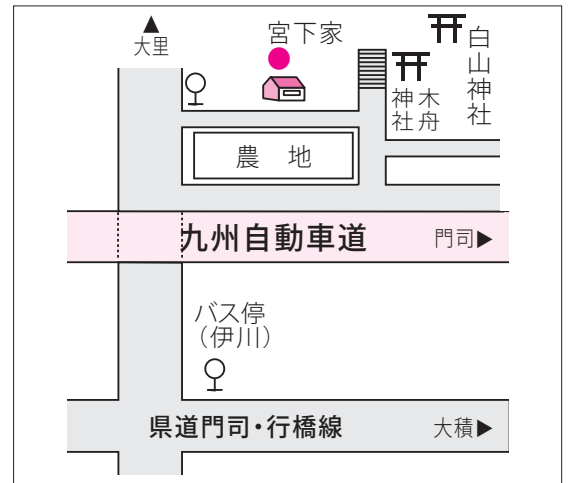
猿喰土壌へのアクセス

縄文時代の代表的な遺跡は「貝塚」です。「貝塚」というのは、大昔の人々の共同のゴミ捨て場です。八幡西区の永犬丸貝塚からは、驚くことに、人の頭蓋骨が出土しました。早い時期の縄文人には、人の死があまり大切にあつかわれていなかったのではないのでしょうか。

しかし、時代が進んでいくと、土の中に穴を掘って死者を葬るようになりました。



平山の宮下家の裏畑に残る土壙



平山土壙へのアクセス

平成 14 (2002) 年現在、残っている土壙はこの2基のみです。しかし、2基とも、元の形を保っていません。太平洋戦争中 (1941 ~ 1945 年) に土壙の口と内部を広げて、防空壕にしたからです。防空壕というのは、空襲 (飛行機による空からの攻撃) の時に、避難する所です。

それでも猿喰には、土壙の口をふさいでいた平べったい石と完全な広さを保った1基が残っていました。しかし、九州自動車道の工事のときに、渡辺家の裏山がけずられて、壊されてしまいました。



< 渡辺のおじいさんの話 >

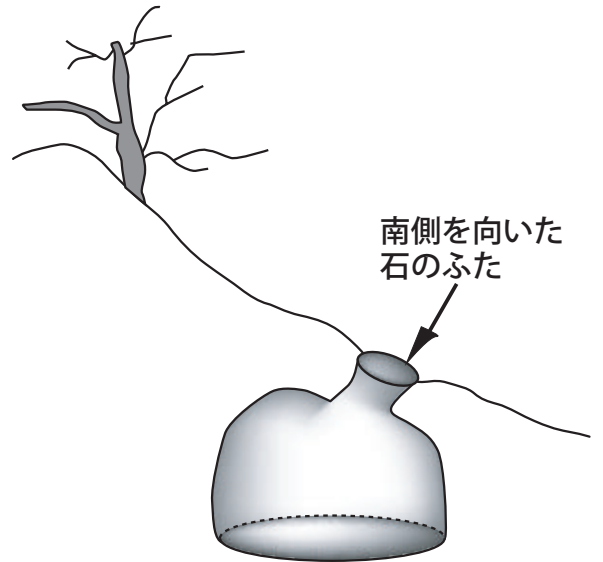
九州大学の先生が来て、中を調べました。およそ3700年前のものと聞きました。中からはらっぽで何も出てきませんでした。私が偶然に見つけたんです。石があったので、ヒョイとのけたら穴が見つかって……中には何もありませんでした。私は夏、時々この穴に入ります。涼しくて蚊がいないんです。スイカを入れておくと、よいかげんに冷えました。

中には何もなかったことは事実でしょう。

この時代の人々には、死者を^{とむら}弔うのに、死者が大事にしていた物や食べ物を供える習慣がなかったからでしょう。

<近藤のおじいさんの話>

こんな穴は、この辺りの山にいくつもあったんですが、道路を広げる工事の時に壊されてしもうたんです。自分たちも大昔の祖先が残した大事なものと知らずに壊したものもあります。今となっては残念でたまりません。



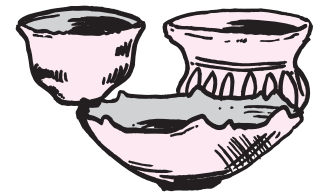
渡辺家にあった土壙

(2) 土器と矢じりを発明していた^{くしげがわ} 檜毛川・^{なかはた} 中畑の縄文人たち

1979 (昭和 54) 年に檜毛川上流の地で、翌年には中畑の地で、遺物が出土しました。九州自動車道になる土地の調査中に見つかったのです。

出土した^{しゅつど} 2つの遺物とは、「土器」と「矢じり」でした。

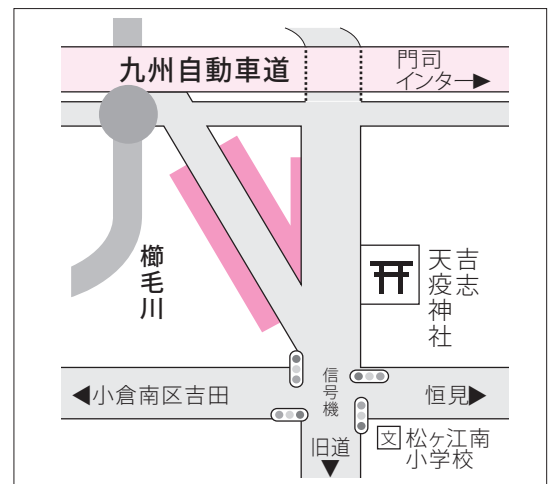
この2種類の遺物から、当時の縄文人の知恵を知ることができます。



○ 檜毛川縄文人がくらしていた檜毛川上流



檜毛川遺跡があった所 (上は九州自動車道)



檜毛川遺跡へのアクセス

○ 檜毛川縄文人の知恵を語る土器の破片

川の流域から出土した物は、縄文土器の破片でした。破片は小さいものばかりで、どの破片も、表面と割れ口がなめらかでした。これは何を物語っているのでしょうか。

それは、

①小さな破片は、元は素焼のつぼや皿のような形をしていたこと

②材料は、粘土質の赤土であったこと

です。

形のない赤土を、形のある皿やつぼに、檜毛川縄文人が作り出したことを物語っているのです。

赤土を形のある物にするには、どのような手順を考え出していたのでしょうか。きっとそれは、次のような手順だったでしょう。

- ①赤土を採取する→②まじっている小石や葉などを取り除く
- ③水を加えてこねる→④形を作る→⑤陰干しをする(ひび割れしないように)
- ⑥火をしいに強めながら焼く

土器を作り出す知恵は、火の利用を、煮炊きや暖房だけでなく、陶器作りにまで広げたことを物語っているのです。

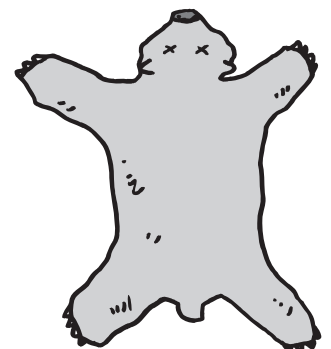
☒ ふるさとの川を捨て、他の所へ移住した(?)檜毛川縄文人

遺物はこの辺りだけに集中していて、川の流域では見つかりませんでした。なぜなのでしょう。

それはたぶん、檜毛川が洪水をおこしやすい暴れん坊の川だったからで、ながくはこの地に住まなかったからでしょう。たびたび起こる洪水が原因で、檜毛川縄文人はこの地を去って行ったのでしょう。

ところで、現在よりも数度高かったと言われる縄文時代の平均気温は、野山に植物をしげらせ、森や林をつくりました。そして、ウサギ、リス、シカ、鳥などの暮らしの場となりました。縄文人は、ドングリなどの木の実や小動物の肉を食べ、毛皮や骨、角などを、暮らしに利用するようになりました。

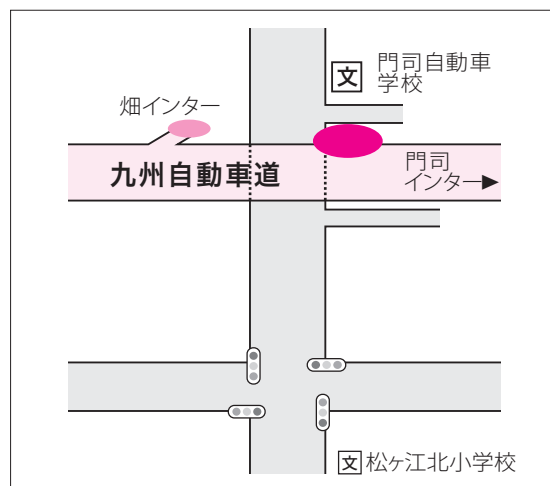
ですから、より多くの食料や獲物を求めて、檜毛川縄文人も移住して行ったのでしょう。



○ 弓と矢を発明していた(?)中畑縄文人



中畑遺跡があった所 (右上は九州自動車道)



中畑遺跡へのアクセス

森や林に住む小動物や鳥は、縄文人の衣と食の暮らしに欠かせないものとなっていました。ところが、小動物や鳥はたやすく捕らえることはできません。そこで、獲物を捕らえるための道具が発明されました。その道具は、「弓と矢」です。矢の先には、黒曜石やその他の堅い石、動物の骨で作った鋭い「矢じり」がついていました。弓と矢によって、狩りは一人でもできるようになりました。

川や海が近くにある中畑では、森や林の獲物だけではなく、海や川でも、弓と矢を使って獲物を捕っていたと考えられます。

○ 姫島縄文人と交易していた(?)中畑縄文人

中畑遺跡の出土品の中に、「白色系黒曜石で作った矢じり」がありました。この種の石は、大分県国東半島の北にある姫島でしか産出しません。遠く離れた姫島の黒曜石が中畑で見つかったということは、何を物語っているのでしょうか。

それは、「姫島人と中畑人との間に交易があった」ということです。それが直接の交易だったのか、小倉や行橋の縄文人を通しての間接の交易だったのか、それは分かりません。しかし、縄文人がよりよい暮らしを求めて互いに交易していたことを、中畑遺跡の矢じりは伝えているのです。

